



TITLE:

<學界展望>隋唐政治史に関する二三の問題：とくに古代末期説をめぐって

AUTHOR(S):

谷川, 道雄

---

CITATION:

谷川, 道雄. <學界展望>隋唐政治史に関する二三の問題：とくに古代末期説をめぐって. 東洋史研究 1975, 34(3): 432-440

ISSUE DATE:

1975-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153594>

RIGHT:

## 學界展望

## 隋唐政治史に關する二三の問題

——とくに古代末期説をめぐって——

谷川 道雄

## 一 は し が き

隋唐時代を中國史の全過程のなかにどう位置づけるかという問題は、學界多年の懸案である。周知の通り、このような問題關心は早く内藤湖南の史論のなかにうかがわれ、そしてその説は今日に至るまでさまざまな形で繼承されているのであるが、一方、戦後になって提起された新時代區分説がある。それは生産様式を基準として各時代を區分し、全體として中國史の前進的性格を證明しようとするところに特色がある。さらにいえば、停滞論克服という目標設定に表明されているように、敗戦を契機としてわが中國史學のあり方に反省を加えんとするところに根本動機を發しており、このように發想の動機および方法において、それはすぐれて戦後の性格を具えた學説である。筆者がこの學説に深い關心を注ぐのは、まさにその現代的性格のゆえに他ならない。

さて、その時代區分法によれば、いわゆる唐宋變革とは、中國における古代奴隸制から中世封建農奴制への、社會經濟構成上の發展を意味するものと理解された。しかしこの説が提起されてから今日

まで、もはや二十五年の歳月を経過し、その間にはさまざまな學問上の曲折があった。當然のこととしてこの新學説にも若干の變化を生じたのであり、なかでも最大の變化は、奴隸制説に大きな動搖の生じたことであつた。すなわち、西嶋定生氏によつて提起された秦漢Ⅱ奴隸社會説は、やがて氏自身によつて撤回され、氏は改めて秦漢帝國論を構築するに至つた。この變化が隋唐帝國の理解にも影響したことは當然豫想されるのであるが、しかしその實態はあまり明確にされていないようである。

やや結論めくが、奴隸制説は隋唐時代についても主張されなくなつた。しかし隋唐時代までを中國における古代とする考えそのものは、今日なお有力に存在しているように感じられる。とすれば、その古代像にどのような相貌が與えられているかは、ぜひとも明らかにしなければならない問題である。

小文の意圖は、必ずしも隋唐Ⅱ古代末期説の批判にあるのではない。敗戦後三十年を経た今日、中國史學における「戦後」を振り返り、そこにこめられてきたさまざまな問題の構造と意味を掘り起して、今後の探究に資することが、筆者の本意である。隋唐Ⅱ古代末期説は、戦後を最も自覺的に生きてきた學説の一つである。その意味で、この説の内容を明らかにし、そこから生ずる問題點を明確にすることは、この説の立場に立つと否とに關りなく、今後の隋唐史研究に有益であると信じて疑わないものである。

## 二 古代末期説における古代の意味

戦後いちはやく唐代までを古代とする見解を發表したのは故前田直典氏であつたが、氏の論は京都學派の中世説に對して古代説を主

張することに急であつて、それがいかなる古代であつたかについては、あまり説くところがなかつた。戦後の中國史學の課題は、世界的視點に立つと同時に、それを中國史の具體相を通して立證することにあつたのであり、その意味では、その後の西嶋氏の家父長的家内奴隸制説は、奴隸制の中國的形態をとり出そうとする試みであつて、この課題を強く意識していた。また、やがて氏がこの説を撤回するに至つたのも、この課題に對して一層忠實たろうとしたためであつた。

ところで、西嶋氏の秦漢—奴隸社會説に接合した形において唐宋變革を意義づけ、新學説に寄與したのが、堀敏一氏であつた。封建制の時期を宋代以後に設定する試みは、すでに右の前田氏のほか、加藤繁・周藤吉之兩氏の莊園制・佃戸制研究をふまえた石母田正氏らによつて提唱されていたが、唐宋の變革過程そのものを對象としてこの課題に立ち向つたのは、一九五〇年度歴史學研究會大會における堀氏の報告「中國における封建國家の形態」が最初であらう。<sup>⑧</sup>

堀氏がこの報告の中で一番問題としたのは、次の點であつた。宋以後の佃戸制を農奴制として規定したとしても、それに對應する國家は、封建化して分權體制を強めるどころか、却てますます中央集權的官僚國家として發展するという事實がある。土臺と上部構造のこのようなあり方を、いかに整合的に把えるか。堀氏によれば、宋以後の集權制は古代的遺制と見るべきでなく、むしろ古代末期に蓄積された階級矛盾のはげしさがこれを要求したものである。中國の古代社會はきわめて長期にわたる歴史をもつが、その過程で奴隸所有者たる古代豪族は官僚化して國家に寄生するに至り、一方、農業生産力の發展は農民の獨立性を高めて均田體制の基盤をなす。これが

古代末期としての隋唐帝國の二大特徴である。

したがつてその解體過程にも、官僚制的なあり方がつきまとうのであつて、安史の亂後に出現する新興勢力も、唐朝官僚制に依存しつつ成長する。農民の無產化は、このような新舊の支配勢力の下で、しかも商品流通を背景として進行する。そのため階級矛盾はきわめて激烈なものとなり、これが黃巢の亂に歸結する。農民叛亂の巨大なエネルギーは舊支配層を一掃し、新興勢力はかかる階級闘争を鎮壓するために集權的國家權力を要求したというのである。

唐宋の新興勢力に對する理解は、氏のその後の研究によつてさらに深められる。すなわち藩帥と親兵、叛亂指導者黃巢とその麾下、あるいは土豪的莊園主と莊戸等々の支配構造に分析のメスが入れるのであるが、氏はこれらが何れも家父長制支配の枠をこえることができなかったこと、つまりそれらが封建的政治組織として成熟せず、集權的官僚國家に依存しなければならなかったことを立證しようとしたのである。

五〇年代の堀氏における隋唐—古代末期説の主要は以上の如くであるが、この場合における「古代」とは、どのような社會構成に集約されるのであろうか。先述のように、均田體制に依存する寄生官僚の原型は奴隸所有者たる豪族であるが、その支配構造については、この時點では明らかにされてはいない。しかしその發展が隋唐專制國家に歸結すると見ているところから推測すると、西嶋氏の家父長的家内奴隸制説のように、小農民層によつて補充された體制であつたと考えてよさそうである。また、それが隋唐專制體制に統合されたあと、その崩壞過程には、家父長制的支配構造をそなえた新興勢力が出現する。とすれば、一九五〇年代の堀氏における「古代」と

は、先ず第一に家父長制支配であり、つぎに、そのネガティブな側面であるところの官僚制であったと見てよいであらう。

ところで、一九六〇年代に入つて、堀氏の研究対象は、唐末五代の政治史から均田制へ、更には六朝の貴族制へと時代を遡る傾向を見せる。すなわち、隋唐帝國を秦漢帝國崩壊後の情勢のなかでどう把えるかという問題に立ち向うのであるが、そこには五〇年代に見られなかった新たな視角も加わっている。それは、西嶋氏が奴隸制説を撤回したのちの學界の動向とも見合うものである。以下堀氏の研究成果について展望を試みたい。

氏によれば、秦漢帝國とは、氏族制社會の中から析出された家父長家族を直接の支配対象として個別人身支配を貫徹する體制である。つまり國家と小農民の直接的關係が國家の基本をなすと考えるのであり、その意味では西嶋氏の新説と軌を一にする。しかしこの支配關係が、父老ついで豪族の在地支配によって内面的に支えられているとする點で、増淵龍夫氏の説に傾いている。豪族は一面大土地所有者であると同時に一面在地の共同體指導者である。しかし前者の側面は一般小農民を没落させることによって、共同體秩序を崩壊せしめてゆく。漢帝國の滅亡はその歸結である。

このようにして登場した豪族階級は、政權の外側から出發してその内面に食い入り、魏晉以後九品官人法を通じて官職を獨占し、官僚貴族に成長する。かの門閥貴族制は、かかる豪族の私的勢力と秦漢以來の專制的政治構造とが結合したがたに他ならない。

しかし門閥貴族が官職を獨占して在地の共同體から遊離すると、國家はこの矛盾を利用して、その大土地所有を法體系の中に組み入

れつつ、小農民に對する直接支配を企てる。これが均田體制であり、國家は從來豪族の掌握していた共同體機能を自らの手に収めることによって、それを實現するのである。このことを堀氏は、秦漢帝國崩壊後の情勢の中で個別人身支配を再編成したものと規定している。

唐中期以後の情勢についての發言はあまり多くはないが、個別人身支配の崩壊、門閥貴族より文臣官僚制への地位交代をメルクマールとし、佃戸制を農奴制に比定することの可否についても再検討の必要があると考えているようである。<sup>⑤</sup>

さて以上のように概観してみると、六〇年代以降の堀氏においては、もはや家父長制的支配には力點が置かれず、その代りに國家と小農民との直接的關係が基本とされる。言ってみれば、一九五〇年代には家父長制支配のネガティブな側面であった官僚制支配が積極化されたわけである。そして秦漢がその最初の形態であり、隋唐がその再編成されたがたである。もつとも、秦漢と隋唐の間には豪族階級の發展史が介在しており、先ずそれは專制帝國を在野において支えるが（秦漢）、やがて官界を獨占的に掌握し（六朝）、最後に帝國權力に寄生する（隋唐）。しかしかかる豪族階級の運動にもかかわらず、專制權力の個別人身支配そのものには變化がないのであつて、その意味で秦漢——隋唐を同質の歴史世界とする見解は、依然堅持されているのである。

### 三 寄生官僚制説をめぐって

以上に見てきたように、堀氏の隋唐理解では、豪族は官僚化して國家に寄生し、國家は人民を直接に支配する。しかしこうした理解

は必ずしも堀氏だけに限らないようである。たとえば菊池英夫氏は、かつて西魏・北周時代における郷兵集團の國軍化を目して、郷兵統率者（豪族）の寄生官僚化過程とみなした。これは兵制上から見た寄生官僚制説である。

寄生官僚制説は國家權力に豪族（貴族）勢力から超越したオリジナルな權力を認めるのであるが、隋唐交替期の政治史に關する布目潮風氏の説も、これと一脈通ずる點がある。氏は内藤湖南の六朝・隋唐＝貴族社會説を批判して、隋・初唐權力が關隴集團によつて據われたことを主張する。氏によれば、關隴集團は鮮卑系胡族及びそれに奉仕した北朝の武人官僚出身者より構成される。筆者自身は關隴集團を新貴族制という表現で把えようとしたことがあるが、布目氏は關隴集團には貴族制ないし新貴族制といった概念では本質づけられないものがあるという。とすればそれは貴族制の外にある勢力と解されるのであるが、氏はそれに積極的な規定を與えていない。推測するに氏がこの集團の異民族的、武人的性格を強調している點からすれば、そうした要素を主體とする國家の強權は、貴族階級から獨立した位置にあるものとして理解されているようである。

六朝以來の門閥貴族階級が隋唐時代に入つて官僚的性格を強めたことは否定できないところであらう。しかしそのことをもつて、國家を貴族階級から獨立した存在とみなしうるかどうかは、なお検討の餘地があると思われる。隋唐中世説の立場をとる磯波護氏はこの點で右の所説とやや異なる説を提示している。郷官廢止と九品官人法の廢止によつて門閥貴族層が在地支配者としての地位を喪失して官僚貴族化したという氏の見解は、一見寄生官僚制説に近づぐがごとくである。しかし氏によれば舊門閥の政治的勢力はなお強いものが

あり、科擧制の創設もその力を減殺するには至らなかったという。つまり氏における官僚貴族の概念は、超越的權力としての國家權力に依存して延命する貴族の末路を意味するのではなく、門閥貴族の發展形態としての王朝貴族を内容としているように感じられる。

磯波氏のこうした所説は、その個別人身支配説批判につながつてゆく。なぜなら個別人身支配説こそは、貴族階級から超越した國家の存在を一方に於て想定するものだからである。氏は、隋代の貌閱が大した効果を擧げなかったこと、初唐・盛唐時代に食實封が盛行したこと、隋唐時代に均田制の實行された可能性の稀薄なること等々の例證を擧げて、個別人身支配説を批判したのであった。その一々の實證は精確で傾聴すべきものを含むが、ただ個別人身支配説の根底的批判のためには、國家の諸施策（たとえば均田制）の實行の有無のみならず、その理念そのものが果して個別人身支配的であつたか否かの検討が不可避であらう。更に大切なことは、氏が官僚貴族という概念を用いるとき、それが隋唐帝國の律令制的支配構造をいかに擔つているかを、より積極的に明らかにすることであると思われる。

要するに、寄生官僚制説を採るにせよ採らぬにせよ、隋唐帝國とは一體いかなる支配權力であるかが、改めて問われなければならないであらう。筆者にとつて寄生官僚制説が直ちに納得しがたいのは、この見解に立つた場合、ではかかる隋唐專制權力はいかなる社會階級の權力意志であるかが判然としなくなる點である。これを貴族階級のそれと見ることはできない。なぜなら、かれらは國家に依存し寄食しているのだからである。かかる國家はそれでは何を根源として生み出されたのであらうか。ここで再び堀氏の所説に關わつて

みたい。

堀氏の均田制説は前述の通りであるが、筆者はそれについて二つの相関連した疑問を提出した。

(一) 堀説は豪族體制に内在する矛盾を地主制的側面と共同體的側面との矛盾と規定しただけで、この矛盾が歴史的にどう展開していったか、その點の實態的分析に乏しく、したがって均田制成立の必然性がそこから説かれ切っていないうらみがある。

(二) (一)と關連するが、均田制の施行の主體として、豪族體制から獨立した國家の權力意志を設定しているため、結果としては「國家對豪族」論に陥っているようにおもわれる。

先ず(一)についてはその後堀氏もこれを肯定したが、筆者はさらにこの問題のもつ論理構造につき、自説を發表した。(二)については、堀氏が均田制の前段階ともいふべき北魏の計口受田制を三國の屯田制に比定したことを批判しつつ、かかる問題を提示したのであった。この計口受田制の理解問題はともかくとして、「國家對豪族」論に陥っているのではないかという私の批判に對しては、氏は次のように答えた。「この點については、私が豪族體制的矛盾を考えていること自體、單純な國家對豪族論をとっていないことは明瞭であろうが、しかし漢代以來王朝體制がうけつがれていることと、とくに鮮卑の征服國家權力の成立が、この時點で均田制の施行を可能にしたという契機を重視しなければならず、したがって施行の具體的過程では、この鮮卑國家と漢人豪族社會との對立があらわれることを指摘したい云々」。

秦漢以來の傳統である專制體制と北魏の異民族政權としての武力とが一體となつて、均田制施行を可能にしたであらうことは、堀氏

の指摘の通りである。しかしそれは施策の條件にすぎない。あるいは政策を遂行する國家の形態にすぎない。これをもって均田制を遂行する國家の歴史的性質とすることはできないであらう。その本質を説明するためには、國家權力をになう階級の權力意志の表現として均田制を解釋することが要請される。しかし堀氏の構想では、門閥貴族階級をかける階級と見なすことはできない。それは均田制推進の主體的意志ではないからである。

このようにして、堀氏の説における均田體制ないし隋唐國家は、一定の社會的現實を構成している階級關係の所産として十全に説明されつくしてはいないように感じられる。これは堀氏に限らず、また隋唐時代に限らず、國家と小農民の關係を基本的支配關係とみる見解に共通した問題點のように思われる。そこでは、國家權力は社會内部の階級關係から説明されず、一種先驗的な存在として取り扱われる傾向があるように感じられるのは、筆者の偏見であらうか。

もちろんそうした問題を生ずるのは、中國における國家權力の專制的な性格、換言すれば社會を單純に支配階級と被支配階級の二つに大別し國家は前者の後者に對する抑壓機構であると割り切つてしまふことのできない性格のためであると思われる。しかしだからと言って、國家を社會内部の階級關係から超絶した存在としてとらえることができるであらうか。

このジレンマを解くためには、中國における階級關係のあり方について、検討の必要があるように思われる。年來筆者らの提唱してきたいわゆる共同體論は、こうした課題を前提とするものであった。すなわち、共同體關係と階級關係の相互媒介こそが、中國社會にとに六朝貴族制社會の支配の實態ではないかと考えるのである。こ

のことについては、すでにさまざまな文章において述べたので、ここでは省略したい。また、筆者自身の均田制や郷兵集團乃至關隴集團に對する理解が右のような社會把握と相表裏していることについても、一、二の拙論を参照していただきたいが、一口つけ加えておくならば、筆者はこれらを貴族制の發展形態と考えるものである。

專制體制に直接につながるこのような事象を貴族制の發展形態と理解することには、あるいは異論があるかも知れない。しかし六朝貴族が多く官僚としてその階級的姿態を表わす理由にまで遡って考えると、當時における階級關係は、私有財産制によって明確に區分されているというよりは、民衆に對する管理者の性格の有無を重要なモメントとしているように感じられる。つまり階級區分は本來政治的區分たる性格を内在させており、このような性格が政治の統一のシステムを作り上げてゆくところに、專制體制の形成があると見ることも可能である。門閥貴族の寄生官僚化説は、隋唐成立期のみならず、はやく六朝時代についても云々されることがあるのであるが、その當否は、當時における階級關係のあり方をどう理解するかにかかっているように思われる。<sup>④</sup>

以上隋唐Ⅱ古代末期説を、五〇年當時から現在に至る學界の歩みのなかで検討してきた。このプロセスの最初の時点からすれば、當時時代の歴史的展開を社會の面から把握するという方法が深まって來ているとは言える。しかしその一方で、專制體制という形式上の連續性によつて秦漢と隋唐を同質の世界として理解しうるかどうか、その疑問は未だ取り除くことができない。この問題を解決するためには、專制體制としてあらわれる國家がいかなる階級關係の表現形式なのかを追求することが必須であらう。

#### 四 唐宋變革の論理について

第二節で述べたように、五〇年代における堀氏の唐宋變革論では、唐朝の律令制的秩序を破つて登場してくる新興諸勢力は家父長制的支配構造に貫かれるものであった。それは一つには中國社會の封建化の前提であり、二つには、その封建化の政治的未熟さを示すものであった。六〇年代以降になると、氏の研究對象が時代を遡ったこともあって、こうした議論は見られない。しかし栗原益男氏の唐末・五代史における諸論考では、依然として家父長制支配が説の中心概念になっているようである。

栗原氏は、五〇年代の中頃、唐末・五代の藩鎮において節度使と親衛軍との間に見られた假父・假子の結合に關する研究を發表した。<sup>⑤</sup>それによれば、唐代中期の藩鎮における假父子結合が集團型であるのに對し、唐末・五代のそれは個人型である。したがって前者の假子は主體性が稀薄であり、奴隸的であるが、後者のそれは主體性が増し、隸屬性が少くなっている。ただ、このような相違にもかかわらず、兩形態に共通して言えることは、いずれも家父長制的支配であるという。

氏のその後の研究も、この假父子結合の家父長制的關係を軸として展開されているが、それは氏の唐宋變革論にどのような意味を附與するのであるうか。氏によれば、假父子結合したいには一定の發展があつたものの、結局個人と個人との關係という枠を出ることができず、假父家と假子家というような家と家との關係にまで定着しなかつた。つまり古代律令國家の崩壞の中から形成された武人間の私的主從關係は、かく非世襲的な、いわば未成熟な段階に止まっ

た。このことが宋朝以降の集権的文臣官僚體制を成立せしめたことと關わっているという。これは栗原氏が——五〇年代の堀氏もそうであったが——藩鎮の私的結合關係の中に前封建的家父長的性格を見ながら、結局はそれが封建的政治機構に發展しえなかった未熟さを説いたものである。

その未熟さは、古代官僚制を克服しえなかった未熟さである。たとえば、藩鎮の基盤をなす傭兵制は政府の兩稅收奪に依據している。又節度使や州將の職任も官僚制の一環であつて、頻繁な轉任からそのことが明らかである。要するに、新興勢力たる藩鎮も在地にしっかりと足をふまえたものではない。藩鎮のみではない。黃巢が長安を占領したさい、叛亂指導部は中下位の唐朝官僚はそのまま任用して改めるところがなかった。これは新政權を構成するのに既存の唐朝支配組織を導入しただけであつて、唐朝官僚制を克服したとはいえないと論じている。すなわち黃巢の革命政權さえもかかる未熟さを拂拭できなかったというわけである。

もちろん氏は唐代中期の藩鎮から黃巢の亂へ、黃巢の亂から五代の新情勢へと、當時の政治過程がはげしく展開してゆくことを跡づけているのであるが、それにもかかわらず、一方では、そのように生み出される新しい政治體制に限界があつたことを指摘する。その限界とは、古代官僚制から中世封建制へという歴史發展の基準に照らして認識されるところの限界である。唐宋變革をこの基準で捉えることが適切であるかどうか、諸現象がこの基準に對して否定面しか表わさないとするれば、この基準そのものの再檢討が必要となるのではないか。筆者は最近このような疑問を提出したが、この點に關連してさらに考察すべき問題が存在するようにも思う。

先封建制としての家父長制支配というカテゴリーが唐宋變革の把握に適切でないとしても、唐末の新興諸勢力に擬制家族的構造の存在していたことは、あるいは承認しなければならない。それをどう理解するかという問題である。この點を假父子結合に即して考えた場合、そこにさまざまな課題がひろがつてゆくように思われる。まず節度使と親兵との假父子結合の背景として、栗原氏も述べるように、節度使と一般傭兵との間の對立關係がある。周知のように、唐代兩者は給與をめぐつてしばしば對立抗争し、その結果節度使が放逐され、もしくは殺害されることが決して珍しくない。しかし將兵間のかかる對立關係は六朝時代にはその例を見ないところであつて、將兵は一般に身分的に區別され、將は兵を人格的に支配しているといつてよい。とすれば、唐代藩鎮のこうした事態は、その人格的身分的支配關係の破綻を意味するのであり、節度使の親兵蓄養および兩者間の假父子結合は、この事態への對應策であるといふことができる。すなわち、假父子結合の背景には、將兵間の身分的人格的隸屬關係の破綻という新事態が存在するのである。

このような新しい事態は、假父子結合を外側から規定しているだけであろうか。假父子結合の外形はたしかに擬制家族的であり、あるいは家父長制的であるかもしれない。しかしそれは、西嶋氏の舊説にいづゆる家父長的家内奴隸制とは、内容的に異なっている。各家族に收養される奴婢がかりに家父長的支配の下に置かれていたとした場合、主人と奴婢との間はいうまでもなく越えることのできない身分制で隔てられている。したがって、奴婢が擬制家族員として主家を相續するというようなことは原則としてありえない。これに對し、假父子結合においては、假子は假父の統率權を繼承す



ることが可能なのであって、そこには身分上の區別はないと考えてさしつかえないであろう。要するに、同じように家族として包容されていても、そこには身分的と非身分的の相違がある。

このように、假父子結合は内的にも外的にも非身分制によって規定されているのであり、かかる構造こそ、當時の歴史性なのではなからうか。かえりみれば、家内奴隸制としての奴婢制も、殷周の氏族制的社會の崩壊が生んだ新しい歴史性であった。それは氏族秩序の解體という事情をふまえて人びとが相互に結びあった人的結合の一形態であった。それと同じように、假父子結合は、身分制社會の崩壊という情況において成立した新しい結合形式ではなかったであろうか。とすれば、類似した擬制家族的外形の中に、實は相異なる史的内容がみだされていると見るべきではなからうか。

小文の最後に指摘しておきたい問題は、ではこの假父子結合と集權官僚制との關係はどうかという點である。堀・栗原兩氏が述べているように、一般に當時の新興勢力は個々の政治權力として自らを維持することなく、終局的には集權官僚制にとって代られる。つまりそれは一時的權力に終り、當時の社會を全面的恒久的に把握しうるものではなかったのであるが、それにとって代った集權的官僚制は、非身分制的官僚制、いわゆる科擧官僚制であった。新興勢力の支配體制と集權官僚制との間には、私的公公的かという形式上の差異があり、それが封建的政治組織の未成熟云々の議論を生むのであるが、しかしそれらの歴史的内容そのものに眼を注ぐならば、身分制打破という共通項があって、前者から後者への移行もさして不自然ではないように思われるのである。

## 註

- ① 石母田正「中世史研究の起點——封建制への二つの道について」(東京大學出版部編『日本史研究入門』・松本新八郎「原始・古代社會における基本的矛盾について」(歴史學研究會編『世界史の基本法則』岩波書店)
- ② 歴史學研究會編『國家權力の諸段階』岩波書店、所收。
- ③ 「唐末諸叛亂の性格」(『東洋文化』七)・「黃巢の叛亂」(『東洋文化研究所紀要』一三)・「藩鎮親衛軍の權力構造」(同二〇)「唐末の變革と農民層の分解」(『歴史評論』八八)など。
- ④ 「北朝の均田法規をめぐる諸問題」(『東洋文化研究所紀要』二八)・「均田制の成立」(『東洋史研究』二四・一一・二)・「均田制と良賤制」(仁井田博士追悼論文集一、岩波書店)・「九品中正制度の成立をめぐる」(『東洋文化研究所紀要』四五)・「貴族制社會の成立」(『中國文化叢書八 文化史』大修館書店)・「魏晉の占田・課田と給客制の意義」(『東洋文化研究所紀要』六二)など。
- ⑤ 「唐帝國の崩壊——その歴史的意義——」(『古代史講座』一〇、學生社)。
- ⑥ 「北朝軍制に於ける所謂鄉兵について」(『重松先生古稀記念九州大學東洋史論叢』。なお拙著『隋唐帝國形成史論』(筑摩書房)二二〇—二二二頁参照。
- ⑦ 「隋唐史研究」(東洋史研究會)・「隋唐帝國」(講談社)・「隋唐帝國の成立」(『岩波講座世界歴史五』岩波書店)など。
- ⑧ 前掲『隋唐帝國』一四一—一五頁。なお筆者の同書書評(『名古屋大學東洋史研究報告』三)参照。

- ⑨ 「中世貴族制の崩壊と辟召制」『東洋史研究』二二—三・「宋代士大夫の成立」『中國文化叢書八 文化史』大修館書店・「隋の貌聞と唐初の食貨封」『東方學報・京都三七』・「唐中期の政治と社會」(『岩波講座世界歷史』五)・「律令體制とその崩壊」(中國中世史研究會編『中國中世史研究』東海大學出版會)など。
- ⑩ 「均田制の理念と大土地所有」『東洋史研究』二五—四)。
- ⑪ 「中國古代史と共同體の問題」『駿臺史學』二七)。
- ⑫ 「『共同體』論争について——中國史研究における思想狀況——」(『名古屋人文科學研究會年報』一)。
- ⑬ その細部は、堀敏一「均田制と租庸調制の展開」(『岩波講座世界歷史』五)・前掲拙著「三三—三四頁參照。
- ⑭ 前掲「中國古代史と共同體の問題」。
- ⑮ 前掲「均田制の理念と大土地所有」・『隋唐帝國形成史論』第Ⅲ編各章。
- ⑯ 拙稿「六朝貴族制社會の史的性格と律令體制への展開」(『社會經濟史學』三一—一五)參照。
- ⑰ 「唐五代の假父子的結合の性格」(『史學雜誌』六二—一六)・「唐末五代の假父子的結合における姓名と年齢」(『東洋學報』三八—四)。
- ⑱ その論旨は、「貴族政治から文臣官僚體制へ」(『世界の歴史』六、筑摩書房)・「安史の亂と藩鎮體制の展開」(『岩波講座世界歷史』六、岩波書店)・前掲『隋唐帝國』(講談社)などに述べられている。
- ⑲ この點は松井秀一氏も、「唐朝デイスボテイズムの再現である」と性格づけている(「唐末の民衆叛亂と五代の形勢」『岩波講座世界歷史』五、岩波書店)。
- ⑳ 前掲、『隋唐帝國』書評。